



うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

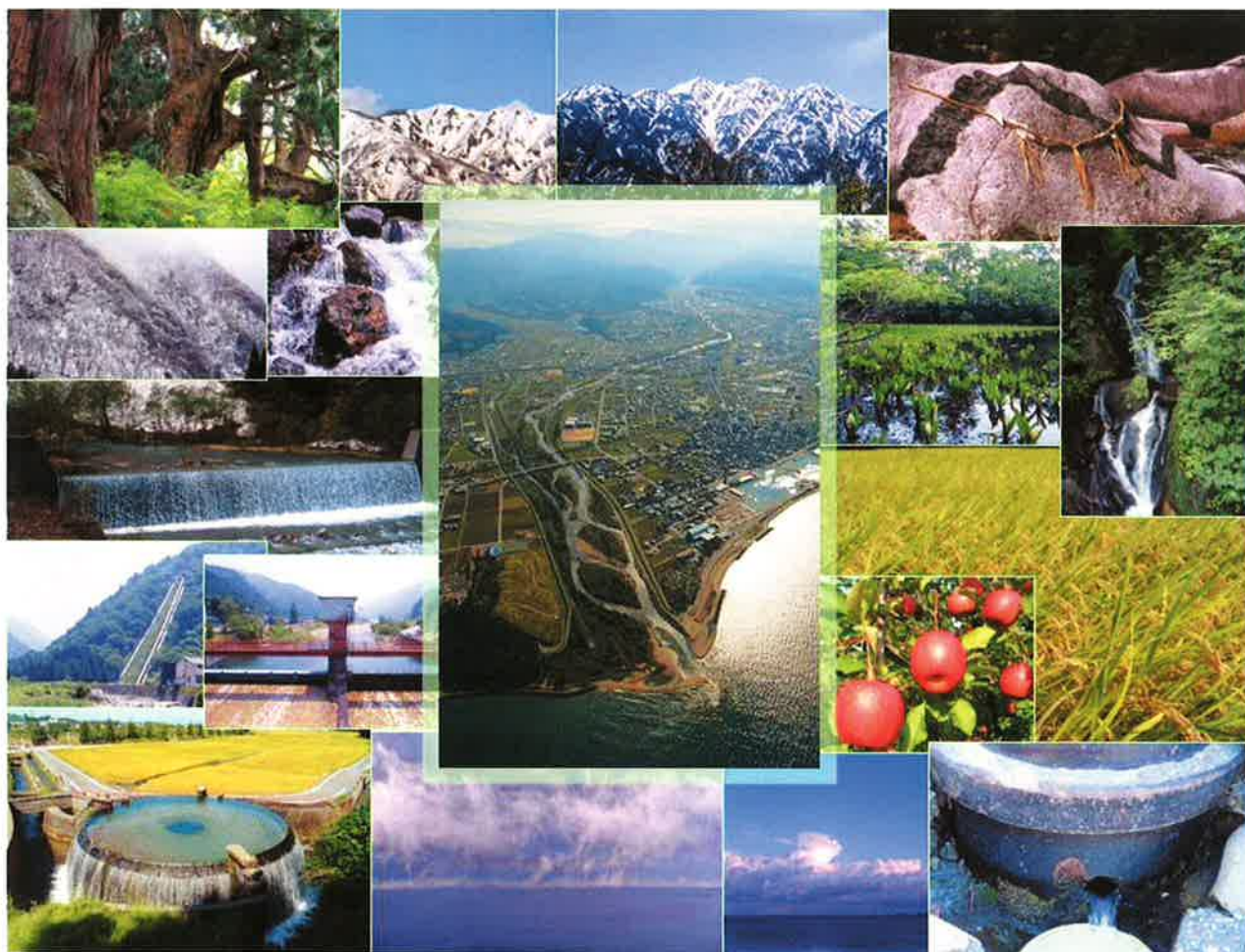
第33号

発行日：平成23年2月28日

編集発行：魚津埋没林博物館

印刷：魚津印刷（株）

魚津をめぐる水



①洞杉の森②僧ヶ岳③毛勝山④水神“蛇石”⑤冬の積雪⑥溪流⑦池尻の池⑧滝滝⑨砂防ダム⑩片貝川
⑪水力発電所⑫取水施設⑬リンゴ栽培⑭稲作⑮円筒分水⑯富山湾の蒸気霧⑰雪雲⑱湧き水“てんこ水”

魚津市は、海岸の0mから高山の2415mにいたる高度差が、奥行き約25kmの中に凝縮されています。その中を片貝川や角川など源流から河口までが魚津市内で完結する河川が流れています。海から生まれた雲を経て雨や雪となって降り注ぐ水は、山や川に生きる多様な生物をはぐくみ、市民の生活や産業を支え、また海へと帰っていきます。

魚津は、特異な地形が生み出す水の循環と、それがはぐくむ豊かな自然に恵まれた地域なのです。

魚津の“めぐる水”の風景

学芸員 石須 秀知

魚津市の面積は、約200平方キロメートルです。その魚津市の大地には、片貝川、角川、布施川、早月川などの河川が流れています。特に片貝川は、2400mを超える魚津市の最高峰、毛勝三山などを源流とし、その流域(※)の面積は魚津市の6割以上を占めます。(※ここでいう流域とは、山に囲まれ、降った雨や雪の水が川に流れ込む集水域と、その川が運んで堆積した土砂からなる扇状地や三角州などの平野を合わせたものとします。)

ここからは、片貝川をめぐる水と、それに結びついた自然や人が作り出す風景をピックアップして紹介します。



僧や馬の雪絵が現れる僧ヶ岳

片貝川の出発点は、山岳地帯です。冬に山岳地帯を覆う厚い積雪は、春から夏にかけて豊富な水をもたらします。雪が水へ変わっていくときに、自然が描く壮大な絵があります。僧ヶ岳の雪絵です。冬には雪に覆われ白一色だった山も、春になり雪どけが進むと地肌が現れ、まだら模様になります。雪絵とは、その模様をいろいろな形に見立てたものです。雪絵が現れる山は各地にあります。僧ヶ岳の雪絵は種類が多く、変化も多様なことが特色です。雪どけが進むにつれて

形を変え、合体し、名前も変わっていきます。カレンダーではわからないその年ごとの気候が反映される雪絵の変化は、農作業の時期や川の水量を知る目安として、かつては生活に密着した意味を持つものだったのです。



水が森から流れ出す

山に降る雨は、大部分が森に落ちます。保水力に富む森の土壌は、雨の水が一気に流れ出ることを防ぎながら、片貝川の大事な水源となっています。そして、森を通り抜ける水は、そこにすむ多種多様な動植物の生命を支える一方で、森の土壌から栄養分などを受け取って川や海の生物たちへ渡す役割もしています。水が森を育てると同時に、森も水を育てているといえます。



水をエネルギーに変える水力発電所

川を流れる水は、自然の循環とは別に、いろいろな形で人に利用されています。そのひとつの形が、水から電気エネルギーを得る水力発電です。片貝川には7か所の水力発電所があります。それらは川から取り入れた水を山の中に通した導水管で下流へ導き、落差をつけて発電する水路式という形式をとっています。水路式の水力発電は、大規模なダムを作る必要がありません。発電所を出た水は再び取水され、下流にある次の発電所へ送られます。



円筒分水と稲の実り 遠くには海

水と人との結びつきの中で大事なもののひとつが、農業用水です。片貝川が作る平野は、急流が山を削った土砂を吐き出して堆積した扇状地です。扇状地は石や砂が多いため水持ちが悪く、水不足になりがちです。そのような土地では農業用水の分配は死活問題で、かつては深刻な対立を生む原因にもなりました。それを解決し公平な水分配を実現するために作られたのが円筒分水です。円筒分水とは、大きな円筒の底から水を湧き上がらせ、下流の耕地面積の比率に合わせて仕切った円周から均等にあふれさせて水を分ける施設です。丸いケーキを切り分けるように水が分配されているのが誰の目にもわかります。円筒分水は日本各地にあります。片貝川右岸のものは水量、落差、透明度など見ごたえがあります。



階段状の田んぼ

片貝川の扇状地は、海岸までずっと約2%（距離100mにつき2mの高さ）の傾きがあります。この傾きによって、棚田とまではいきませんが、田んぼは一枚ごとに段差のある階段状になっています。そのため水田地帯では見晴らしがよく、たわわに実った黄金の海の向こうに、富山湾の青い海を見ることができます。



水への祈りを受け止める蛇石

水は、発電や農業のほか、生活用水や工業用水などとして私たちの生活を支えています。水が、自然にも人にもあらゆる意味で大切であることは、昔も今も、そして将来も変わりません。片貝川の上流には、水の神としてまつられた“蛇石”（または龍石）という石があります。谷間の流れの脇にある幅2mあまりの白っぽい石に黒い岩脈が走り、名前のおおきな蛇か龍が張り付いたように見えます。昔、猟師が山中で大蛇に遭遇し、鉄砲で射止めるとそれが石に巻きついて息絶え、大雨が降って水害を起こしたという伝説があります。毎年、水害がなく水が安定供給されるよう、魚津市内の関係者が集まって蛇石の祭礼が行われ、水への祈りは現代にも引き継がれています。

片貝川は、2400mもの標高差をもちながら、全長30kmに満たない短い川です。言い換えれば、それは源流と海とが近いことを意味します。海岸からわずか1時間ほど自動車で行けば、水源域の森まで行くことができます。その距離の中に、

ここで紹介したものをはじめとしたさまざまな“めぐる水”の風景が凝縮されています。山と川と海、自然と人、めぐる水を介したいろいろなものの結びつきが見える場所、それが片貝川の特徴、そして魚津の特徴なのです。

シリーズ

埋没林の仲間たち ③②

ヨモギ属(キク科)

道端や空き地などでよく見かけるヨモギは、草全体に独特の香りがあり、昔から身近で有用な植物として利用されてきました。春の若芽は草もちにするほか、ゆでたり天ぷらにして食べられます。成長した茎や葉も、野草茶や入浴剤、そして“もぐさ”の材料などに利用されます。もぐさはヨモギの葉の裏に生えた白い毛を集めたものです。



道端によく生えるヨモギ

ヨモギ属の仲間は、人里に多いヨモギのほか、川原に生えるカワラヨモギやオトコヨモギ、やや高い山地に生えるオオヨモギやヒトツバヨモギなど環境によってすみ分けています。



葉が切れ込まないヒトツバヨモギ

* * *

富山県内のヨモギ属は十数種類記録され、魚津市内では10種を確認しています。魚津埋没林では、平成元年の発掘調査でヨモギ属の花粉が検出されています。

ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 休館日 12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
- 入館料 ・大人(高校生以上)・・・510円 ・小中学生・・・250円
- 交通 ・JR北陸本線魚津駅 } 下車1.5km (タクシー・・・5分)
- ・富山地方鉄道 新魚津駅 } (徒歩・・・25分)
- ・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

特別天然記念物 **魚津埋没林博物館**

〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765) 22-1049

ホームページ <http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/>

e-mail nekkolnd@city.uozu.toyama.jp

